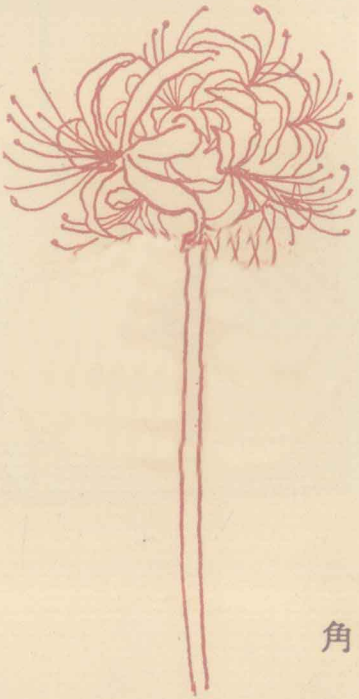
彼岸花

里見 弴



角川書店

彼岸花

昭和三十三年八月三十日　初版發行
昭和三十三年九月二十五日　四版發行

定價　二五〇圓

著作者　里見弴
發行者　角川源義
印刷者　草刈親雄
製本者　宮田勝太郎
發行所　株式會社　角川書店
東京都千代田區富士見町二ノ七
振替口座　東京　一九五二〇八番
電話九段（33）〇一一一（代表）

Printed in Japan　中央製本印刷・宮田製本
落丁・亂丁本はお取替へいたします

目次

彼岸花　五
山小屋　毛
臥柳自生枝　八三
ノイローゼ　一〇一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

火蛾　一三一
薄れ行く燈　一六五
原田文書に關する記錄　一七七
あとがき　二二〇

彼岸花

鎌倉驛十三時半發、上り三等車のあけ放した窓際で、着た物を通して滲み入るやうな秋口の日射にも、速度につれて耳朶を鳴らすほどの風當りにも、莨を三本喫つたのと、それが癖か、時をり脣邊をもぐ〳〵させるのとを除けば、殆ど身動ぎひとつしずにゐる半白の紳士があつた。遠く近く移り行く外景に、睫毛が接はんばかりの薄目を据ゑたきりにしてゐたが、この目、終戰までは、海軍中佐の軍服を着けての日ごとの通勤に、混み合つて立たされないかぎり、二等車の一隅で、乘るから降りるまで、必ず書籍の頁の上を、縱か横かに忙はしく動いてゐたもの、……さう言へばがらりと身裝も變つた。ワイシャツは洗ひたてだし、濃紺、三揃の背廣にも、一目瞭然、着る前の念入りなブラッシュやプレスが思ひやられたけれど、褐のソフトからネクタイ、靴まで、人品に似合はしからぬ質素さだつた。……貯金や家財などもとより言ふに足りず、同時に、軍備を放棄した國家の舊軍人ほど身の振り方のつけにくいものも少からうが、慌てる遑さへないほどの近間に潛んでゐた貧窮に、溺れる者は藁をも、の洒落どころか、現に藁を束ねた座敷箒を擔ぎ歩いて、どうやら口を糊した頃もあり、その當時の、階級章の黑筋をひッぺがした作業帽、いづれも吊るしんぼのジャンパー、コールテン・ヅボン、兵隊靴、それからすれば今日あたりは最上着で、友達の娘の結婚披露宴、と言つても時節柄、二時半――四時半と時間を區切つてのカクテル・パーティに招ばれて行かうといふ、その道中で、おまけに案内狀の追伸には「平服にて」としてあり、毫も恥づるところはない……。

今日娘を嫁ける安藤といふのは、小學、中學、高等學校にかけて一二級の後輩で、上海事變の當初、某誌の寫眞班員として着くなりすぐ訪ねて來、互に久闊を喜び合つて、出來るだけの便宜も計つたが、一別以來、横濱驛の歩廊で、箒賣り姿での邂逅には忽ち目を潤ませて、「ねえ、三上さん、なんとか僕に考へさせてくれませんか。今日は急ぎますけど、名刺、でなくつてもお所を、……きつと二三日うちにお訪ねしますから」「いや、それぢやア恐縮だ。鎌倉ですしね、……かまはなければ、こつちから伺ひますよ」「さうですか。では、これ……」と名刺を渡しながら、「兩方書いてありますけど、午前中なら大抵會社の方にゐますから」「但し、やはりこの裝で行くがね、箒、買つてくれますか」「えゝ〳〵、それアもう、何本でも」で、笑つて別れたやうなわけだつた。

寫眞の製版や印刷を專門とするT社の應接間に於ける對座に、上海時分の思ひ出話に花が咲き、言はれて、――へーえ、そんなことがあつたかと、思はず首を傾げたのだが、或る日の訪問中、食事時刻となり、誘はれるまゝに守備隊の、二十人ほどの部下も交へて食卓を共にしたところ、隊長だけにオムレツがついたのを見て、「おい、これ、お客樣にも……」從卒が、配給の材料に規定ある由を答へると、「さうか。ぢやア、安藤君、君、これ食べなさいよ」先輩の言葉ゆゑ、遠慮は却つて失禮と思ひ、あたりへの氣兼ね、きまり惡さを無理にも怺へて、大急ぎで平げて了つた、と、笑ひながらにも、一生忘れられないといつた風な話し方だつた。そのあと、箒一本に對する口錢を訊き、瞬間眉間によつた皺を吹き飛ばすやうな笑ひ聲で、「ぢやア、三百本、いつでも御都合の時に屆けて頂きませうか」「それア有難いが、三百本とはまた……」「いや、だいぢよぶなんです。カレンダーなんて、……毎年我社でもあつちこつちの御註文を承つてますけど、どうもあれも、方々から貰

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ふ身になつてごらんなさい、あんな始末に困るものはありやアしません。ですから、今年はひとつぐッと趣向を變へて、お顧客先へ、御歳暮に箒を配らうといふ……」「うん、それアなか〳〵名案だが、昔ッから、福を掃き出すとか言つて、三ケ日は……」「でも、その前に、歳尾の煤掃き、……今で謂ふ大掃除つてやつがありまさアね」

ほどなく、安藤の斡旋で、浦賀の造船會社から、可なりの位置の社員に、との申出があつたのを、われから望んで工員の職に就き、爾來早くも九年、累進して今や工場長……。

うつとり、では長閑すぎるし、無念無想、では悟り臭く聞えるし、放心、では半開きに脣邊のたるんだ感じも伴ふだらうが、少くとも彼の目には、速く遲く窓外を掠め去る永年見馴れた景色が、おのづと映りはしても、一々感受されてゐようとは思へなかつた。ひとり窓外ばかりでなく、驛ごとの乘り降り、隣や差向ひの席の起居、談笑、あらゆる事象からも超然としてゐた。さうかといつて、沈思默考の固い表情とは遙かに遠い安らぎの、强ひて覺めれば、奥底ふかく、一抹、憂愁の影を湛へた、とでもいふところか。それとも、心に居留守をつかはせてゐる横着か……。

*

海軍省作戰本部勤務の幕僚だつただけに、三上周吉には、假令どんな天佑がおこらうと、所詮どんでん返しの利かぬ敗北といふ見通しは、山本元帥の戰死よりもつと早くからついてゐたが、家族の者まで含めての聾棧敷、――軍人の所謂「地方人」に對する時、氣振にもそんな心境を讀ますまいとの自戒に些の緩みもなかつた。昭和改元の年に結婚して、すぐ翌年の春、はや〳〵と出來た總

領の子が、終戰の一年ほど前に、學徒動員で川崎の軍需工場に通ふことになつても、「お國の御用だ、しつかりやんなさい」と、いつにない嚴肅な面持で言ひ聞かせたし、防空壕内に十數人の同級生と折り重なつて、僅か十八年の生涯を鎖したと知つた時でも、少くとも人前では、涙一滴みせはしなかつた。軍律に從つてさういふ堅牢な假面の被れる自分自身を省れば、一言半句言へた義理でないことも承知でゐながら、勤務中、上官や同僚の、全然内容のからツぽな大言壯語を聞くうち、腹立たしさや嫌惡は一足跳びに、いきなり救ひのない憂鬱に突き落される、謂はゞ心の習慣のやうなものがついて了つた。しかも、その場合だけは、なんとしても假面を被る氣になれず、以前に變る沈思や緘默、時には苦々しげな澁面などが、次第に部内の反感を買ふに至つて、或る時など、酒氣を帶びた某大佐に、「なんだ、貴樣、いやにインテリ面アしやアがつて！　一丁氣合ひをかけてやらうか！」と呶鳴りつけられたのも、もと〳〵三上が帝大時代の工科を卒た機關將校で、何かにつけ、實科の者とは反りの合はない傾きはあつたにもせよ、水に油の遊離さ加減が、さうたう露骨だつたことも確だ。

長男とは間五年を隔てて生れた娘が十二歳になつた年の八月十五日には、電波にのつた降伏の詔勅が、身も世もあられぬ悲歎、切齒扼腕の憤激、遲きに失したとは言へかくてこその安堵など、心ごころとは言ひながら、全國民を震駭せしめた。ついその五十日ほど前に嗣子を喪くして以來、持病の心臟瓣膜症が亢じて臥たり起きたりの半病人だつた母なる者は、天皇の、雄々しくも喰ひしばられる悲しいお聲を聞き終るや否や喪神し、夜半に歸宅した良人を、睜つたきりの目にそれと見わけたかどうか、もとよりもの言はず、明方ちかい事切だつた。

訃音に駈けつけた周吉の、十一も年齢の違ふ妹で、開戰間もなく良人に戰死され、寡婦となつてゐた佐和が、取敢ず家事、葬儀一切を宰領して以來、木から落ちた猿同然の兄と、小學校六年生の姪とを見捨てて去りもならず、引き續き、箒賣り時代の極貧をも共にし、年々くらしは樂になつて來たものの、兄妹の仲でさへ出來るだけ口にしまいとするやうな、深い愁ひが潛んでゐた。といふのが、今では三上家の一粒種なる娘・文子の、二十歳を迎へた年齢、父親との烈しい正面衝突の擧句、ぷいと出て行つて了つたきり、いつかもう四年になる失跡だつた。

＊

K會館の、玄關へかゝる石段で、歸つて行く紳士・淑女の流れと摺れ違ふのに、一層どぎまぎして、「鶴見家・安藤家御結婚式場」の立札も目にはいらず、給仕をつかまへて訊くと、突ッ慳貪に「二階です」……駈けあがる階段、途中の踊り場でくるり一廻轉して、あがりきつた突き當りの預り所に帽子を差し出す途端、肩を竝べての近さから、

「おい、なんだ、いまごろ來て」

見れば、これも小學、中學、高等學校、科こそ違へ大學まで同年に卒た平山渉だつた。

「やア」

「やアぢやアないぜ。もうすぐ新夫婦が旅行に出かけようつてとこだ。何してたんだい、今時分まで」

「それより、安藤君どこに居るかねえ」

「いま來るだらうけど、こゝは邪魔ンなる、階下の廣間で見送つてから歸らう。……もういゝ、今さら帽子なんぞ預けてどうするんだ」

自分のを受け取ると、背を押すやうにして階段にかゝり、「安藤、なんかひと言でも君に喋らせるんだつて、ずゐぶん待つてたぜ」

「いやア、そんなこたア俺にやア出來んがね、しかしすまんことぢやつたなア」

廣間にはいく團りか、兩家の親戚と思ぼしいのが立話をしてゐた。平山は、正面に階段を見るあたりに足を停めて、

「一體、どうしたつてんだ。まさか今日つてことを忘れてたんぢやアあるまいが」

「どうかしとる。何しろ案内狀を置き忘れて來たつてことを、東京驛に着くまで、まるッきり氣づかずにゐたんだからなア」

他人事ながら腹が立つ、といつた語調で、

「それでわざ〳〵鎌倉まで取りに歸つたのか」

「いやア、そこまで間が抜けとりやアせんが、會場がわからんので、安藤の會社や自宅に電話で訊き合はすのに、やたら手間どつて了つてなア」

「第一、品川で降りればすぐやアないか」

「それア、こゝとわかつとればさうしたらうが、なんとなく丸ノ内とばかり思ひ込んどつたもんだからな。……いやア、ひとつへまをやると、あとから〳〵いやに續くもんでねえ」

「あ、來た來た」

旅行に出る平服の新郎・新婦を先に、媒妁人夫妻、兩家の親たち、近親など十人あまりが、早くも寛ぎの、いくぶんがや〳〵といつた雰圍氣に包まれて降りて來た。その一團のなかにいちはやく舊友の姿を見つけ出さうと伸びあがるばかりで、三上には、肝心の花婿・花嫁など目にとまらなかつた。……踊り場のあたりで、血色のいゝ、若々しい顏に似合はず綺麗に白髮になつた安藤の妻女に何やら囁かれて、モーニング着用の青年が、忙がはしく取つて返したが、その間にも一同は、廣間を横切り、見送りのために居殘つた人々とも合流して、賑々しく玄關にかゝつた時分に、早く早くと急きたてる樣子で、背後を振り向きふりむきの青年が階段を駈けおりると、五六歩おくれて……。

「なにまご〳〵してるんだ、安藤のやつ」

と、さも齒痒げに平山が呟き、玄關のはうへ目を向けると、人々の渦に揉まれて來た新夫婦は、早くも自動車の扉ちかく、手を振りかざしてゐるのに、思はず大胯に歩み寄りながら聲をかけようとした時、あともう二三段といふところでぴたりと足を停めて了つた安藤は、そこからも見えよう、片手を欄干に、ぢツと玄關先に瞳を据ゑたまゝ、……奥齒の嚙み締めで瘤こぶになつた頰が蠢き、顳顬に怒張した青脈は今にも破裂せんばかり、……喜怒哀樂のどれひとつとも片づけられない、何かぎり〳〵いつぱいの表情に、恐らくたつた二人の目擊者なる三上と平山、その場に釘づけの、言葉とてなかつた。

車廻しの石甃を二三間も來かゝつたあたりで、背後から安藤の細君に呼び止められ、――ちよつとでもうちに立ち寄つてくれまいか、と懇請された平山は、露骨な迷惑顔で、

「折角ですがねえ、お互に忙しくつて、めつたにこいつとは會へないんで、これから二人で一杯やりに、……ですから、清子と娘には先に歸れつて言つて來たやうなわけで……」

「えゝ、それも奥様に伺ひましたけど、……いえねえ、實はわたくしども、今からうちへ歸りましても、急に二人ッきりになつて了ひまして……」

「うん、ぢやァ、清子をおつれください」

「我儘を申しあげて誠に相濟みませんのですけど、安藤が是非ともさうお願ひして來い、さもなければ、自分があなた方にくッついて行くんだつて、まるで駄々ッ子みたいなことを申しまして……」

呑み込み顔に、三上が割り込んで、

「行つてあげよう。いや、伺はうぢやァないか」

「お前にやァ、遲參したお詫びといふ重大責任があるが、俺ァもう大嫌ひなスピーチまでやらされてるんだ」

「愚圖々々言はずに行け！」

「ほゝう、鼻ッ張りだけで、相變らず軟弱外交だなァ」

と輕い笑ひ聲をたてて、「ぢやァ、家内にさう仰有つてくださいませんか、そこらで車を拾つて行くから、節子をつれてすぐ出て來るやうにつて」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com